

未公開株の罠、堕ちたモデルの排泄と種付け 地獄くふたなり穴と菊門の同時開発・浣腸 脱糞配信・雌豚洗脳く体験版

1

都心の一等地に聳え立つ、会員制高級ホテルの最上階。選ばれた人間しか足を踏み入れることを許されないその場所では、今宵も政財界の重鎮や新進気鋭の実業家たちが集い、シャンパングラスを片手に虚々実々の駆け引きを繰り広げていた。煌びやかなシャンデリアの下、ハイブランドのスーツに身を包んだ男たちの笑い声と、高価な香水の香りが充満している。

そんな華やかな場違いな空間に、斎藤京治（さいとうきょうじ）は緊張で喉を鳴らしながら立っていた。二十三歳。普段は都内の商社で事務職として働く傍ら、その中性的な美貌を買われて読者モデルとしても活動している。細身ながらも程よく筋肉のついた肢体、少し長めの前髪から覗く大きな瞳は、見る者の庇護欲と、それ以上に暗い加虐心を掻き立てる危うさを秘めていた。

「……落ち着け。ただの話を聞くだけだ」

京治は震える手でカクテルグラスを握りしめ、自分自身に言い聞かせる。今日のパーティーへの招待状は、モデルの仕事を通じて知り合ったイベントオーガナイザー、佐伯了（さえきりょう）から届いたものだった。

『京治くん、君の将来のために、特別な投資の話があるんだ。未公開株だよ。今のうちに手を出しておけば、一生遊んで暮らせる』

佐伯の甘い言葉は、実家の借金返済に追われる京治にとって、まさに蜘蛛の糸だった。リスクがあることは承知していたが、今の生活から抜け出したい一心で、彼はこの場に足を踏み入れたのだ。

「おお、京治くん。来てくれたんだね」

背後から声をかけられ、京治はびくりと肩を跳ねさせた。振り返ると、初老の男――佐伯が、にこやかな笑みを浮かべて立っていた。

「さ、佐伯さん……。ご招待ありがとうございます」

「いいんだよ。君のような美しい若者には、チャンスが必要だからね。……さあ、例の話をする相手が待っている。別室へ行こうか」

佐伯に背中を押され、京治は会場の奥にある重厚な扉へと案内された。そこは、パーティの喧騒が嘘のように遮断された、防音設備の整ったVIPルームだった。

部屋の中には、革張りのソファに深く腰掛けた二人の男が待っていた。一人は、鋭い眼光を眼鏡の奥に隠した、冷徹そうな男。証券会社のエリート社員である吉良純史（きらよしふみ）、二十六歳。仕立ての良いストライプのスーツが、その神経質そうな細身の体を包んでいる。

もう一人は、対照的に野性味あふれる大男。IT企業役員の紅炎寺卓也（こうえんじたくや）、三十三歳。シャツのボタンを二つほど開け、分厚い胸板と太い首を晒している。その眼は、入室してきた京治を値踏みするように舐め回していた。

「紹介しよう。彼が斎藤京治くんだ」

「……初めまして、斎藤です」

京治が頭を下げると、吉良が冷ややかな声で応じた。

「座りたまえ。時間は金だ」

「へえ……。写真で見るとより実物の方が数倍美味そうだ」

紅炎寺が低い声で唸り、舌なめずりをするような視線を送ってくる。京治はその視線に生理的な不快感を覚えたが、ぐっと堪えて二人の対面のソファに腰を下ろした。

佐伯は「では、私は席を外すよ。ゆっくり話し合うといい」と言い残し、逃げるように部屋を出て行った。重い扉が閉まる音が、まるで牢獄の錠が下ろされた音のように響いた。

「単刀直入に言おう。君が欲しがっている未公開株の件だが」

吉良がタブレット端末を操作しながら、淡々と話し始めた。画面には複雑なチャートと、桁の多い数字が並んでいる。

「この銘柄は来月には上場が確定している。今のうちに購入すれば、リターンは確実だ。だが、それには当然、相応の『元手』が必要になる」

「も、元手ですか……。あの、僕はあまり貯金がなくて……」

「金の話ではない」

吉良が言葉を遮り、眼鏡の位置を指で直した。レンズの奥の瞳が、爬虫類のように冷たく光る。

「我々が求めているのは、信用だ。君がこの情報を漏らさず、そして我々のパートナーとして相応しいかどうかの、ね」

「信用……どうすれば、信用してもらえるんですか？」

京治が身を乗り出すと、それまで黙って聞いていた紅炎寺が、獰猛な笑みを浮かべて立ち上がった。巨軀が京治の目の前に迫る。圧倒的な威圧感に、京治は息を飲んだ。

「簡単なことだ。お前の全てを俺たちに曝け出せばいい」

「えっ……？」

「とぼけるなよ。お前、自分がどういう身体をしているか、わかってるんだろう？」

紅炎寺の太い指が、京治の顎を乱暴に掴み上げた。心臓が早鐘を打つ。

（ばれている……？ まさか……）

京治には、誰にも言えない秘密があった。男として生まれながら、股間には未発達な陰茎の根元に、女性器——膣とクリトリスが存在するという、特異体質。いわゆる『ふたなり』と呼ばれる身体だ。それを隠すために、彼は常に厚手の下着をつけ、恋人を作ることもし避けて生きてきた。モデルの仕事でも、決して下半身のラインが出る衣装は着なかった。

「な、何を言って……」

「佐伯から聞いているぞ。珍しい『カントボーイ』がいるとな」

吉良がソファから立ち上がり、京治の背後に回り込む。逃げ場は塞がれた。

「ち、違いますッ！ 僕は普通の男で……！」

「嘘をつくなッ！」

紅炎寺の怒声と共に、京治の身体はソファに押し倒された。革の冷たい感触が背中に伝わるよりも早く、紅炎寺の剛腕が京治の両手首を頭上で拘束する。

「い、いやッ！ 離してッ！ 警察を……！」

「呼べるものなら呼んでみろ。ここでの会話は全て録音されている。君がインサイダー取引に加担しようとした証拠と共に、君のその『秘密』を世間にばら撒いてもいいんだぞ？」

吉良が耳元で甘く囁く。その言葉は、京治の抵抗する力を根こそぎ奪い取った。社会的な死と、秘密の暴露。京治の顔から血の気が引いていく。

「おとなしくしていれば、悪いようにはしない。……さあ、見せてみる。その稀少な穴を」

紅炎寺の太い指が、京治のベルトに掛かった。ガチャリ、とバックルが外れる音が、処刑の合図のように響く。

「や、やめ……やめてください……ッ！ ああッ！」

ズボンと下着が一気に引き下げられる。涼しい空気が、普段隠し続けてきた恥部を撫でた。京治は恥辱に顔を歪め、必死に太ももを閉じて隠そうとするが、紅炎寺の怪力には敵わない。強引に両脚をM字に開脚させられ、股間の秘密が白日の下に晒された。

「……ほう」

「これは、想像以上だな」

二人の男の視線が、京治の股間に釘付けになる。そこには、真珠のように白く滑らかな肌の中に、小ぶりだが愛らしい陰茎と、その下に慎ましく閉じた秘裂が存在していた。男根と女陰が同居する、背德的で淫らな光景。恥ずかしさと恐怖で、京治のペニスは萎縮し、逆に秘裂からはじわりと愛液が滲み出していた。恐怖を感じているはずなのに、男に見られているという興奮が、身体の奥底で疼き始めているのだ。

「ひ……っ、見ないで……見ないでえッ……！」

京治が首を振って懇願するが、男たちの欲望に火をつけるだけだった。

「素晴らしい。男の身体に女の性器……。神の悪戯か、それとも悪魔の贈り物か」

吉良が冷たい指先で、京治の敏感なクリトリスを弄った。

「あひいッ！？ あ、あ……ッ！」

予期せぬ快感に、京治の喉から情けない声が漏れる。普通の男にはない、強烈な性感帯。そこを的確に弾かれ、京治の腰がビクリと跳ねた。

「ふうん、ここが弱いのか。男のなりをして、随分と淫らな声を出す」

「いや……っ、そこ、いじらないで……ッ！ 変になっちゃう……ッ！」

「変になればいい。お前は今日から、ただの男じゃない。俺たちの肉便器になるんだ」

紅炎寺が京治の脚をさらに大きく広げ、顔を股間に近づける。熱い吐息が秘所に吹きかけ、京治はゾクリと背筋を震わせた。

「さて、どっちの穴から開発してやるかな。……この処女のマ×コか、それとも男としてのケツか」

紅炎寺の太い指が、ぬめる秘裂を割り、その奥にある未開の膣口と、そのさらに後ろにあるきつく閉じた肛門の間を這い回る。会陰部を指の腹で強く擦られ、京治は「あゝッ、うゝッ」と濁った悲鳴を上げた。

「り、両方なんて……無理……ッ！ 壊れちゃう……ッ！」

「安心しろ。俺たちがたつぷりと愛してやる。……未公開株の情報料は、お前の身体で払ってもらうぞ」

吉良が京治のワイシャツのボタンを引きちぎり、露わになった乳首をつねり上げた。

「ぎいッ！？」

鋭い痛みが胸に走ると同時に、下半身では紅炎寺の指が、ついに秘裂の中へと侵入を開始する。

「まずは、濡れ具合を確かめてやろうか。……ほら、力を抜け」

ヌチッ……。

粘着質な水音を立てて、異物が京治の女性器へと潜り込んでいく。生まれて初めて他人に侵入される感覚。異物感と、それを上回る屈辱感、そして抗えない快樂の予感が、京治の理性を粉々に砕いていく。

「あ、あ、あ……ッ！ はいっ、入って……くるうッ……！」

「キツいな。だが、中は熱い。……男を知りたくてうずうずしていたようだな」

「ちが、違ッ……！ そんなこと……ひグッ！」

否定しようとした口を、吉良の唇が塞いだ。強引に舌をねじ込まれ、口内を蹂躪される。上からは吉良のキスと愛撫、下からは紅炎寺の指による凌辱。逃げ場のない快樂の嵐が、斎藤京治という人間を、ただの雌へと墮としていく儀式が始まったのだ。

「んむ……ッ、んんーッ！ ふ、ぐうッ……！」

酸素を求めて喘ぐ京治の顔は、苦痛と快樂で紅潮し、目尻には涙が浮かんでいる。その表情は、モデルとしてのキメ顔よりも遙かに淫らで、男たちを興奮させる媚薬そのものだった。

「いい顔だ。……さあ、たつぷりと啼かせてやる。夜はまだ始まったばかりだぞ」

紅炎寺は指をさらに奥へと突き入れ、Gスポットを探るように内壁を搔き回した。京治の腰がガクガクと痙攣し、意識が白く弾ける。これは悪夢だ。しかし、目覚めることのない、甘く激しい地獄の始まりだった。

2

「んぐうッ、あゝっ、あゝッ……！ や、やめ、そこ、搔き回さ……っ！」

VIPルームの重厚な空気が、卑猥な水音と京治の悲痛な喘ぎ声で汚されていく。

紅炎寺の太く無骨な指が、京治の股間に秘められた女性器——これまで誰にも触れさせることのなかった処女の膣内を、暴力的なまでの愛撫で蹂躪していた。二本、そして三本。指が増えるたびに、未開発の窄まりは悲鳴を上げ、同時にその異物を受け入れるために大量の愛液を溢れさせる。

「素晴らしい締めりだ。指が食いちぎられそうだぞ」

「そ、んな……ひうッ！ ぬ、抜いてえ……ッ！」

「抜くわけがないだろう。ほら、もつと腰を振ってこいつを飲み込め。お前は今日から、株の配当を生む代わりに、快楽を生む雌になるんだ」

紅炎寺は野卑な笑みを浮かべ、手首のスナップを利かせて内壁の襞を抉るように指を動かした。男の荒々しい指使いは、繊細さとは無縁だ。しかし、その圧倒的な力強さが、京治の奥底に眠る被虐的な本能を無理やり叩き起こす。敏感な粘膜が擦れ、Gスポットと呼ばれる性感帯が執拗に刺激されるたび、京治の脳裏に白い火花が散った。

「あひいッ！？ おゝっ、おゝおッ……！ な、なにか、来るッ、おかしくなるうッ！」

「イくのか？ 指だけでイくほど淫乱だったとはな。……おい吉良、こいつの乳首もいじってやれ。感度が良すぎて可哀想だ」

紅炎寺の言葉に、京治の頭上で冷ややかな視線を送っていた吉良が動いた。破られたシャツの隙間から覗く、桜色の乳首。男にしては色素が薄く、小ぶりの突起が、恐怖と興奮で硬く尖っている。

「ふむ……。モデルというだけあって、肌の質感は上玉だ。だが、ここはどうか」

吉良の細い指が、尖った乳首を摘み上げた。甘噛みするような愛撫ではない。爪先を立て、ギリギリと捻り上げるサディスティックな刺激だ。

「ぎいッ！？ い、痛いッ、ちぎれ……っ！」

「痛いか？ だが、下はどうだ。こんなに濡らしているじゃないか」

吉良はあざ笑いながら、もう片方の手で京治の顔を自分の方へ向けさせた。そして、自身の唇を京治の耳元へ寄せ、毒を注ぎ込むように囁く。

「お前は男失格だ。借金まみれの惨めな人生から逃げるためにここへ来て、結局はこうして男たちに穴を貸して喘いでいる。……興奮するだろう？ 自分がただの『穴』として扱われることが」

言葉のナイフが京治のプライドを切り裂く。悔しさと恥ずかしさで涙が溢れるが、それを否定できない自分が恨めしい。乳首への鋭い痛みと、下半身を抉られる快感が混ざり合い、京治の理性のタガが外れかけていた。

「ちが、う……僕は……あゝッ、んあゝあッ！」

「違わないさ。ほら、見てみる。お前のクリトリス……いや、この可愛らしいペニスが、こんなに勃起上がっている」

吉良の視線が、紅炎寺の腕の向こう、京治の恥部へと注がれる。膣を犯されながら、その上にある未発達な陰莖――女性器で言えば肥大したクリトリスに相当する部分が、充血してビクビクと脈打っていた。射精機能はあるものの、大きさは小指ほどしかない、京治のコンプレックスの象徴。

「男根とも陰核ともつかない、中途半端な肉芽。……ここを責められたら、どうなるんだ？」

吉良が乳首から手を離し、身を乗り出して京治のクリトリスへと指を伸ばした。紅炎寺の指が膣内を広げているその真上で、吉良の指先が敏感な先端を弾く。

「ひゃうッ！？ あ、そこ、だめえッ！ そこはあッ！」

脊髄を電流が駆け抜けるような強烈な快感が、京治の全身を襲った。通常の男性器よりも遙かに神経が集中しているその場所は、ほんの少し触れられただけで脳が溶けるほどの刺激を生む。

「ほう、ここがスイッチか。……面白い」

「や、やめ……クリ、いじらないで……ッ！ あゝあゝッ、あゝあゝッ！」

吉良は面白がるように、硬くなったクリトリスを二本の指で挟み、こねくり回し始めた。カリの部分を爪でカリカリと引っ掻き、包皮を剥いては戻す。下からは紅炎寺が膣を突き上げ、上からは吉良がクリトリスを責め立てる。二重の責め苦に、京治の腰が鯉のようには跳ね回った。

「うゝ、あゝあゝッ！ イくッ、いつちやうッ！ あゝ――ッ！」

「まだだ。許可なくいくことは許さん」

吉良が冷徹に告げ、クリトリスの根元を強く圧迫した。射精の寸前で寸止めされ、行き場を失った快感が下腹部で渦を巻く。

「ひグッ……！ く、るし……ッ、出して、出させてえ……ッ」

「哀れな声だ。だが、お前の役目はまだ終わっていない。……紅炎寺、準備はいいか？」

「ああ。こっちの穴は十分に解れた。次はいよいよ、本命の『裏口』を開通させてやろう」

紅炎寺が膣内から指を引き抜いた。

ヌポンツ、という卑猥な音と共に、拡張された膣口から透明な愛液が糸を引いて垂れる。京治はガクガクと震えながら、荒い息を吐いて解放感を味わおうとしたが、男たちの行動はそれを許さなかった。

吉良がサイドテーブルから、銀色のトレイを取り出した。そこには、医療用の浣腸器と、大量のローション、そして不気味なほど太いアナルプラグが並べられていた。

「ひ……っ、な、なにを……」

「株取引と同じだ。投資をする前には、土壌を整えなければならない。……お前のケツは、これから我々の肉棒を受け入れるために、綺麗に掃除する必要がある」

吉良が浣腸器を手に取り、中の液体を確かめるように振った。チャプチャプという音が、京治の恐怖を煽る。

「か、浣腸……！？ いやだ、そんな恥ずかしいこと……ッ！」

「恥ずかしい？ 何を今更。それに、お前のその身体構造だ。膣と直腸がどう干渉し合うか、興味深いデータが取れそうだ」

「やめてくださいッ！ お願いです、それだけは……ッ！」

京治は涙ながらに懇願し、ソファの上で後ずさりしようとする。しかし、紅炎寺の剛腕が京治の腰をガッチリと掴み、逃走を封じた。

「暴れるな。漏らしたくなければ、おとなしくしてろ」

「いやあッ！ 離してッ、うううッ！」

紅炎寺によって、京治の身体は再びM字開脚の体勢に固定される。さらに、腰の下にクッションを敷かれ、尻が高く持ち上げられた。照明の光が、無防備な肛門を照らし出

す。まだ誰も触れたことのない、薄茶色の蕾。そこが、これから行われる陵辱の標的だった。